



やまたき はじめ ● 1998年JA長野厚生連佐久総合病院研修医。2001年一般財団法人君津健康センター医局勤務。2006年千葉大学大学院医学薬学研究院修了。医学博士。現在、君津健康センター産業保健部長、千葉産業保健総合支援センター産業保健相談員。産業医科大学特命講師（ストレス関連疾患予防センター／首都圏専門的産業医養成支援事業）

働く人が健康でいられるようにという精神を これからも引き継いでいきたい

千葉県君津市にある一般財団法人君津健康センターは、当時の新日本製鐵株式会社君津製鐵所（現在は日本製鐵に統合）に設置されていた健康管理部門と、社団法人君津製鐵所安全衛生協力会の健康管理部門が統合するカタチで1988年に設立された、地域性の高い労働衛生専門機関である。同センターでは地域住民の健康保持増進を通して、社会に貢献していくことを目的として、各種健康診断や、健診結果に基づく診察に関する事業のほか、作業環境測定や産業保健・保健衛生に関連する調査研究および教育事業をはじめとした、労働安全衛生関連の幅広い業務を担っている。

そこで今回は、同センターの産業保健部長である山瀧一さんに専属産業医とは異なる立場での企業外労働衛生機関における産業医活動の特色や今後の展望などについてお話を伺った。

複数の事業場に関わる産業医として 事業場間での知恵の交換を仲立ち

現在、私は君津健康センターで日々業務を行っています。午前中は主に健康診断の診察や判定を行っています。午後の大部分は職場巡視に出ています。多くの事業場は月に1回の訪問ですが、複数回訪問する事業場もあります。同じ敷地にある複数の事業場はひと続きの時間枠で巡視することもあります。現在、20か所近くの事業場と契約しています。

最近では面談の対応に使う時間が増えていきます。当センターは職域に隣接しているため、産業医として職場を訪れている時以外の時間枠でも、都合が合えば面談に使うことができるからです。

私は複数の事業場に関わる嘱託産業医ですが、「その事業場の中で、働く人の健康を守るチームの一員」という

点では、嘱託産業医も専属産業医も行うことは本質的には同じと考えています。しかしその一方で、嘱託産業医はその事業場では非常勤のため、外部者という視点もあり、また事業場の労使もそのように捉えることが多いでしょう。これには、「外部だから見える／外部だから言える」、という点と、「外部だから見えない／外部だから関われない」、という二つの側面があります。そのため、事業場の中で、看護職や衛生管理者をはじめとした産業保健活動に取り組むスタッフが活動しやすくなるよう、産業医が支援するという関わり方が重要と感じています。

複数の事業場に関わって感じることは、どの事業場もその成立してきた過程で、大切にしてきたこと、強みが存在する一方で、それが意識できていないこともあるということです。そのため、ある事業場でのよい取り組みが別の事業場にとってもヒントになることがあります。例えば、暑熱作業のある事業場ですでに取り組んでいる対策を、新たに



山瀧さんの職場巡視中の様子

高温の作業場を設けた事業場に紹介するなどです。そのような場面でお互いの知恵の仲立ちができるよう、日々の活動にあたっています。

産業医活動に関わるやりがいは 職場が変わっていく場面に遭遇できること

近年、一部の中小企業では働き方も働き手も多様化していますが、これは時代の変化という以前に、働き手の確保という必要性に迫られての変化だと思います。外国人、心身に障害がある人、高齢者などなど、働き手の背景もさまざまですし、ずっと同じ事業場で残業もいとわず働くという前提で制度を組み立てていては到底、事業が回らないからです。

また働き手の多様化は、健康上の課題も多様化させました。高齢労働者は特に中小企業においては重要な役割を担っていますが、健康上気がかりな点を持つ人もそれだけ多くなります。また心身の健康を損ね、いったん退職した後、ある程度回復してから雇入れとなる人も少なくありません。医学的な視点からの評価や配慮が必要となる場面は今後一層増えるでしょう。

産業医活動に関わるやりがいは、職場が変わっていく場面に遭遇できることだと思います。ある事業場では、安全衛生委員会の折に産業医が職場巡視でどのような視点でみているか、ということを連続でお話ししたところ、管理職パトロールなどの際に、管理者や委員も同様の視点で指摘・改善に取り組みはじめたということがありました。

また多くの事業場で経験することですが、病気の治療で休業や配慮が必要になった方に対して配慮事項やその

後の経過フォローアップを本人・職場も交えて進めていくうちに、別の気がかりな人についての相談があったり、管理者が早めに対処してくれた事例があったりなど、職場全体で気がかりな人を支えようとする流れが生まれていくことを感じます。このような流れが風土として、仕組みも伴ったうえで定着するように支援していきたいと思っています。

センターの特性を活かし 産業医の育成や活動の支援を行いたい

私が今後取り組みたいと考えていることの一つは、産業医の育成や活動の支援です。当センターに所属する医師は内科・外科などの臨床医学や、メンタルヘルス、有害業務管理などの得意分野を持ち、顔を合わせてお互いに必要なことを質問できる・教えあえる関係があります。また保健師・看護師、管理栄養士、健康運動指導士、作業環境測定士などなど、専門のスタッフもいます。事業場の背景を十分に把握した渉外スタッフや情報処理の専門家もいます。

こういった環境は、新たに活動を始める産業医にとってもやりやすい条件がそろっているのではないかと思います。現在、当センターでは、産業医学の修練を行う医師を受け入れています。これから産業医活動を始める医師をサポートする活動も進めていきたいと考えています。

また、すでに活動している嘱託産業医についても、活動時間や場所、また専門分野の違いなどで手が届きづらい場面があるのではないかと思います。そのような場合に、いま選任されている産業医と連携して、その活動を補完するような形でかかわることができないか、探っていきたいと思っています。

さらに、産業医が産業看護職や衛生管理者などの産業保健スタッフを支えていくことで、間接的にはありますが、事業場の産業保健スタッフがよりしっかりとした地位を得て活動できるようにしていきたいと思っています。

私が産業医を始めたころ、ベテランの衛生管理者や産業看護職から多くのものを学びました。昔話を聞くと、こういった先輩たちもその前の世代・前の前の世代の優れた産業医や専門家から多くを学んだことがわかります。職種を問わず、知識や技術、それから働く人が健康でいられるようにという精神を引き継いでいきたいと思っています。